翻訳論文

因果性の知覚——序論 第Ⅰ章：問題のありか

アルベール・ミショット

訳・解題　渡辺恒夫*

＜凡例＞

・これは、ベルギーの心理学者で実験現象学者として知られるミショット（Albert Michotte 1889-1965）の、*La perception de la causalité, 2nde Ed.* Louvain: Publications Universitaires de Louvain, 1954（初版 1946）の訳である。原書が大部であるため、序論中の第Ⅰ章（pp. 1-24）のみの部分訳とし、全体の構想を窺うてがかりとして巻末の目次（pp. 305-306）も訳出しておいた。

・イタリックでの強調部分はゴチック字体で訳し、必要ならカッコ内に原語を入れておいた。それ以外にも重要な部分はカッコ内に原語を入れておいた。

・原書脚注はこの訳でも脚注とし、原書通りの通し番号を振った。脚注での文献参照など、和訳がかえって不便を来たす場合は、訳さずそのままにした。

・訳者注は最小限にとどめたが、必要と思われる箇所では〔訳注‥‥〕〔‥‥〕として本文に挿入し、長いものは脚注とした。また、実験的研究の序論にしては歴史的概観が中心となっており、実験の図解がなく理解をさまたげるので、訳注として図解を挿入しておいた。

・原書には多くのドイツ書・英書からの引用が原語のまま鏤められているが、原語をそのまま引用した後にカッコ内に和訳を付けた。引用文で既存の邦訳があるものはなるべくそれを利用した。

・「訳者解題」を後に置いたが、ミショットになじみの薄い読者にとっては、訳者解題中の「総論」だけを先に読んだ方が分かりやすいかもしれない。

序論　第Ⅰ章：問題のありか（pp. 1-24）

1. 歴史的概観

合衆国はイェール大学で 1929 年に開かれた第 9 回国際心理学会議（IXme Congrés international de Psycologie）での講演で、そしてまた 1937 年にコレージュ・ド・フランスでなされたいくつかの講義で、人間の知覚に関する実験的研究を、これまで以上に**運動活動の意味** *(sens de l'action)* へと向けることの利点を強調する機会が与えられたのだった。この観点から提起される数ある問題のなかでも特に、一方の物体によって他方の物体へなされる力学的運動活動（actions mecaniques）の知覚についての問題について述べたのであり、そ

* Watanabe, Tsuneo 東邦大学名誉教授。心理学。著書『夢の現象学・入門』（講談社選書メチエ）。

れが本研究の主要な対象をなしている。

そのとき以来、われわれは、このテーマに関する広汎な実験的研究に着手してきた。これらの結果のいくつかと、そこから導かれる理論的結論のいくつかがすでに、予備研究のかたちで公刊されているが、それは哲学雑誌の読者へ向けられたものであって概論風のものであった[1]。以下の頁で読者は、心理学専門家に関心のある技術的な詳細に加えて、数多い新しい実験の記述、そしてそれらが寄与することで可能になった理論的発展の報告を、目にすることになるだろう。

知覚というものが運動活動(action)の一局面でしかないこと、そしてその生物学的役割が人間と動物の諸反応（reactions）を開始し導くことであることは、いまさら確認するのも野暮であろう。知覚は彼らに考える材料を提供するにとどまらない。彼らを運動へと導 き、彼らが生活している世界へとその運動を調整することを可能にする。

現象的世界は、じっさい、決して「バラバラな断片」の単なる並置からなるのではなく、あるいは他のものと相互作用したり、あるいは他のものとの関係の中で作用したりするような、諸々の物体の総体からなっている。だから行為（conduites）の調整には、**物体が何をなすか**、もしくは**なし得るか**を、そして生物（とりわけわれわれ自身）がそれによって何をなしうるかを、知る必要があるのである。

特定の物体を、押して動かすこと、滑らせること、持ち上げること、ひっくり返すこと、遠くに投げること、へし折ること、曲げること、折りたたむこと、つっかえ棒にすること、等々が可能であることを、われわれは知らなければならない。また、特定のしぐさ、特定の視線、特定のことばが、他の人や動物を引き付けたり反発させたり、彼らの行動をまったく別様に変えたりしうることを、知らねばならない。

同様に、諸々の物体が人間へ作用するその影響を、衝突すれば怪我すること、突き刺したり切ったりすること、われわれの努力に抵抗すること、扱いやすい形や扱いにくい形をしていること、等などを知らねばならない。

さらに、どの程度に、またいかにして、ある物体が他の物体に作用するのかを知らねばならない。ある対象によって与えられた衝撃が他の対象を動かし得ること、場合によっては他の対象を粉々にし得ること、尖った対象の回転は他の対象に穴をあけること、等々を知らねばならない〔訳注〕。

最後に、これこれの対象が他の対象へと接近すること、あるいは離れることを、ある個体が他の個体を追跡すること、あるいは障害物の背後に隠れること、ある対象を引き出しとか戸棚の中にしまうこと、ワインをグラスに注ぐこと、等々を知らなければならない。

これらの例は、日々の生活のなかでふつうに起こる事態から借りてこられたありきたりのことなので、一瞥して特に問題になるようには思われない。

---

[1] A. Michotte. *La causalité physique est-elle une donnée phénomenalé?* Tijdschrift voor Philosophie, Vol. III, n° 2, mai 1941, pp. 290-328.

〔訳注〕英訳ではこの段落が脱落している。

けれども、実はそうではないのだ。というのも、それらがすべて、空間的運動的な側面を体現するのだとしたら、それらの根本的特徴は対象相互間の**機能的関係**（*relations fonctionelles*）を含むものであり、空間と運動の知覚の分野でどんなに多くの研究がなされてきていようと、その枠組みを優に越えてしまうものなのである。上述の事例の最後の例のような単純なばあいであっても、ワインがボトルの口から**流れ出して**グラスに**流れ込む**のが見えないだろうか？そこには単なる空間内の位置の変化とは、まったく異なる事態がある。

この機能的諸関係が、それゆえ、現象世界の本質的な骨組みをなしているのであって、われわれの諸活動がその展開の場である環境に適応するための、中軸的に重要な要因とみなされねばならない。機能的諸関係はまた、外部の観察者が目撃する人間と動物の行為を理解するためにも、重要な要因となる。これら諸関係は、その点、社会心理学の最初の地平の役割をもになう[2]。とどのつまり、われわれを取り巻くもろもろの物体に意味を与えるのは、これら諸関係なのだ。なぜなら、物体が何**であるか**を学ぶのは、それが何**をするか**を確認することによってなのだから。物体がわれわれにとって何であるかは、その形態や大きさや色彩によっては、まったく不十分にしか語られない。何よりもそれは、物体が何をすることができるか、われわれがその物体によって何ができるかということなのだから。

この点を如実に示す典型的な一挿話がある。我が子のひとりが、かつて三つか四つの時に、客間の壁にかかった絵は「なんの役に立つの」と尋ねたことがあった。説明してやると、その子は、「だったらこれって**何でもない**んだね！（ce n'est *rien!*）」これはまさに、物体の活動(action)が、われわれにとっていかにその本質を構成する（constitutive de leur essence）かを、示す例にほかならない。

物体にその意義を与えている機能的関係のなかでは、物体と物体を結びつける因果関係が相当の比重を占めるのは疑えない。とはいえ、因果関係だけが唯一考慮に値するというわけではない。たとえば、空間的関係もまた同様の役割を果たしうる。かくして、帽子は、子どもにとっては、かなり長い間、「頭の上にのせる」ものであり、箱は「何か別のものを中に入れる」ものであって、その間、この子たちが防護や保管といった機能に思い至ることはないのである。

これらすべては甚だ自明のことなので、おそらくは極端な行動主義者を除いては、誰しもが上述の事柄に進んで同意するであろう。この点、さらに、次のような心理学者の著作を読めば十分である。すなわち、行動を記述し研究することに専心して機能的諸関係が優位を占めることを、その理論的見解が何であれ確認するにいたった心理学者の著作を[3]。

---

[2] 何人かの著者たちは、動物心理学における機能的関係の役割を、とりわけて強調している。例として、W.ケーラーの、**類人猿の知能**についての著書と、E.トールマンの諸著作、とりわけ、**動物と人間における目的的行動**（*Purposive behavior in animals and men*）〔英訳より University of California Press, Berkeley, 1930〕を想起せよ。

[3] 資料は豊富なので引用するのも野暮というものだろう。しかしながら、ここでの論点にとって最も注目すべき著作のなかでも、きわめて最近にフランス語で公刊されたものをあげてお

しかしながら、この諸関係の研究は、実験学派の心理学者たちの関心を、ほとんど引いて来なかった。これにかんして多少なりとも議論を惹起した問題は、理論的なものとしては、この関係の一般的な認識の問題であり、他方、より経験的なものとしては、機能的関係の起源の問題だけであった。最も広まった見解によると、機能的諸関係は感覚所与の二次的な**加工**（*élaboration*）の産物であって、それによって、感覚所与にそれ自体は備わっていない意義が、あれこれの仕方で余分に付け加えられるのだという。

そういうわけで、機能的諸関係という問題は、知覚の心理学のなかで注目されていなかったこと、少なくとも後の研究のために取っておかれるべきとされたことは、当然であった。そこでの根本的問題とは、とりわけ典型的に実験的問題とは、いわゆる「感覚所与」の問題だったのだから。

ゲシュタルト心理学の新しい視点が知覚の諸問題にもたらした劇的変動は、機能的関係の問題をまったく別の仕方で設定しなおす性質のものだった。もっとも、この学派の信奉者によって現在までなされてきた研究は、この問題にほとんど触れてはいない。それは、研究を始めるにあたってなすべき最初の仕事が、既知の知見を見直し、やり直すことであることからして、容易に納得がいく。だからこの学派の圧倒的多数の研究は、形態と運動の知覚そのものに捧げられていたのである。

本研究では、因果性の知覚に問題を限定しているが、他の機能的諸関係もまた同様に、それと類似の方法によって研究しうることは、言うまでもないことである。これから見てゆく因果性知覚実験にもそれらの諸関係が多々介在しているのだし、それら諸関係に向けられたいろんな研究が、実現の途上にあるのだ。

かくして本研究の目標が定まったからには、因果という観念の起源について心理学者によってこれまで提案や認定を受けてきた諸解答を、ここで検討してみるのもよいだろう。

だれもが知るように、因果の観念がいかに獲得されるかという問題は、近代哲学の中できわめて大きな場所を占めてきたのだった。この問題の自然諸科学に、心理学にそして哲学一般にとっての非常な重要性を鑑みればそれは何ら驚くことではない。

実のところ、哲学者たちの心を占めてきた問題は、マルブランシュせよ、ヒュームやカントにせよ、本質的に認識論的な観点のものであった。因果関係の必然性と普遍性という特徴を正当化するものは何かを知ることが、彼らにとっての重要事であった。とりわけ経験論者の著作は、この特徴は直接には経験の所与から借りて来られないということを、示そうとしたものだった[4]。もし議論がそこで留まっていたとしたら、こういった見解は特に

きたい。P.ジャネの諸著作、とりわけ、**知能の始まり**（*Les débuts de l'intelligence*）と、**ことばの前の知能**（*L'intelligence avant le lanngage*）という本、そしてまたJ.ピアジェの、子どもの心理学についての重要な著作。

[4] かくしてマルブランシュによると、「真の原因とは、その結果との間に精神が必然的な関係を観取する（aperçoit）ところのものである」。—L. Brunschvicg, *L'expérience humaine et la causalité physique.* Alcan, Paris, 1922, p. 7. での引用。

われわれを不安にさせるものではなかっただろう。けれどもヒュームは遥かその先に行く。知覚的経験のなかでは、ある物理的出来事が他の物理的出来事におよぼす影響のいかなる直接的印象も存在しないと、明瞭に断言するのだから。そしてこの断定は極めて一般的に採用されるにいたったので、今日なお、ほとんど普遍的に承認されたものと見なされ、さまざまな領域に普及しているのが認められるのである。たとえば、デュルケムのような現代思想の巨匠のひとりが、次のようなくだりを書いているのを読むことができる—

力の「概念が外的経験によって供給されえないことは明白であるし、またこれは誰もが認めることである。感覚は、併存したり継起したりする現象をわれわれに示すにすぎず、感覚が知覚する何ものも、強制的かつ決定的な作用というこの観念—それは能力(pouvoir)ないし力(force)と呼ばれるものに特徴的なのであるが—をわれわれにもたらすことはできない。感覚は、実現され獲得された、相互に外的な諸状態にしか到達せず、これらの［外的な］状態を結びつける内的な過程は感覚から逃れるのである。感覚が知らせるものはいずれも、影響力ないし効力(efficacité)という観念をわれわれに示唆することはできない。」[5]

この引用文にヒュームからの然るべき引用文を対比させてみるのも面白いかもしれない。デュルケムの文章は後者のほとんど翻訳であり、この英国の哲学者の思想が執拗に維持されていることの証言になっていると、思わせるものだから。

参考までに以下に、『研究（Enquiry)』から、いくつか典型的な段落をお目にかけよう[6]。

“It appears, that, in single instances of the operation of bodies we never can, by our utmost scrutiny, discover any thing but one event following another … So that, upon the whole, there appears not, throughout all nature, any one instance of connexion, which is conceivable by us. All events seem entirely loose and separate. One event follows another; but we never can observe any tye between them. They seem *conjoined*, but never *connected*. “[7]（物体が作用する単独の事例で

---

[5] E. Durkheim. *Les forms élémentaires de la vie religieuse*. 3me éd. Alcan. Pari. 1937, pp. 519 seq.〔『宗教生活の基本形態 2014—オーストラリアにおけるトーテム体系（下)』ちくま学芸文庫、山崎亮（訳)、2014、pp.274-275。フランス語ルビは本訳で追加した〕。

[6]〔訳注　原注にある *Essays Moral, Political and Literary*. Ed. Longmans, Green and Co. Londres 1898, pp. 61 seq.（『道徳・政治・文学論集〔完訳版〕』田中敏弘（訳）、名古屋大学出版会）には該当部分がない。英訳に従い、*An Enqury concerning Human Understanding*, section Ⅶ, part ii と修正した。〕

[7] マルブランシュは、いくつかのテクストから判断するに、この点に関してはヒュームよりもいっそう明晰だったように思われる。かくして—
「一個の球が他の球に衝撃を与えるのが目撃されるとき、私の眼は私に言う、少なくとも言うように思われる。前者の球は、それが他の球に押し付けた運動の、実際に原因である、と。」そして言う、「(アリストテレス）は、それゆえ、他の球に衝撃を与える球は、他の球を動かす力を持っていることを、疑わなかった。それがわれわれの目に与えられることである。この哲学者にとってはそれで十分だったのだ。なぜなら彼は、ほとんどいつも感覚の証言に従

は、われわれができる限り探索しても、或る出来事が別の出来事の後に続くこと以外には何も発見できず（‥‥）。それゆえ、全体として、すべての自然を通して、われわれによって思い抱かれうる結合の事例はひとつも見られない。（‥‥）ある出来事が別の出来事に続いて起こる。しかし、われわれはそれらの間のいかなる絆もけっして観察できない。それらは**連接している**（*conjoined*）が、けっして**結合して**（*connected*）いないように見える。〔『人間知性研究』神野慧一郎・中才敏郎（訳）、京都大学出版会、2018, p.134〕）

ヒュームによれば、因果性の（必然的な結合という）観念は、周知のように、現象が継起することの規則性から派生するのであり、もっぱら予見に、あるできごとが、通常それに先行するできごとが生じた時に再び生じる、という期待に基づいている。

“…after a repetition of similar instances, the mind is carried by habit, upon the appearance of one event, to expect its usual attendant, and to believe, that it will exist. This connexion, therefore, which we *feel* in the mind, this customary transition of the imagination from one object to its usual attendant, is the sentient or impression, from which we form the idea of power or necessary connexion.“ (ibid.).（‥‥類似した事例が繰り返された後では、心は習慣によって、ある出来事が現れると、それに通常伴う出来事を予期し、そしてそれが存在するようになるだろうと信じるように導かれる、という点である。それゆえ、われわれが心のなかで**感じる**この結合、つまり、ある対象からそれに通常伴うものへの、想像力のこの習慣的な移行、これが、われわれがそこから力能ないし必然的結合の観念を形成する情感または印象である。〔同訳書、p. 136〕）

言うまでもないが、心理学者たちの間にまでこのテーゼの高い評価が広まったというのが、ヒュームの唯一の栄誉なのではない。このテーゼは、「最も入念に（utmost scrutiny）注意を向けたとしても、自然の諸事象が展開するなかで、それら諸事象の単なる継起以外の何ものも発見することができない」という断定がされるとき、明証性をもって迫って来るように思われるのだ。

実際、物理的諸科学のなかで実践されているような、事実についての客観的かつ分析的な観察に携わるときには、明証的な確認（constatation）が重要である。だからこそ、「外的」世界のなかで「実際に」起こっていることを知ろうと努めるのであり、そのために、認識したく思っている対象の多様な諸部分や、できごとの多様な諸段階を、別々に切り離して検討するのである。それが、ヒュームにならって言えば、たとえば 2 個の玉が衝突するときに（物理的世界のなかで）生じることを知ろうとする際に、起こることなのである。すなわち、分析的観察はそこでは、運動の継起しか明瞭に確認することを可能としないのだ。

うのであって、理性の証言に従うことはめったになかったから。それが理解できるか否かに、甚だしく頭を悩ませることはなかったのだ。」L. Brunschvicg, 同書, pp. 6 -7 での引用。

このタイプの観察は、また、心理学者の観察でもあった。そもそも、自然諸科学において必須となったことで、このような観察が科学的を称するすべての学問分野に拡張されたのは、あまりにも当然なことであった。それゆえ、間違った道を歩んでいたと気づくまでに、たとえこの観察様式が物理的事実を確定するのに最適であったとしても、他方では、現象世界を細分化し、最も興味深い心理的事実が消し去られてしまう結果を招くと気づくまでに、２世紀近くを要したのだった。本書でのテーマについていえば、それはヒュームが言及し、マルブランシュが、脚注７の引用文が証拠立てているようにその存在をちゃんと承知していた、「絆(tye)」の抹殺という結果となったのだった。この問題については、本書８章（Chap.Ⅷ）で、より詳しく論じることになるだろう。

ヒュームの立場は､感覚の世界が刺激の世界の複写だと長いこと見なされていたことで、とりわけて強められてきたということを付け加えておこう。それだから、次のようなことはありえないと思われていたに違いないのだ。すなわち、ある球が衝突によって他の球の運動へと与える「影響」の知覚の場合のように、刺激の領域のなかの対応物なくして何かを知覚することができるなどということは。

そういうわけで、心理学者たちが、ヒュームの主張が正確であるかどうかを、わざわざ組織的な研究によって検証しようなどと毛ほども思わなかったからといって、あまり驚くべきではないのだ。物理的な因果性の問題に関係する知覚という点については、空間中の対象の配置や運動と変化の知覚や、継起と同時性といった問題以外に、問題は存在しないということが、決定的な定説になっていたのだろうから。だから、一般にこの問題にはほとんどの著者が言及さえしないとはいえ、外的経験に関しては、ツィーエン（Ziehen）の次の文章に、すすんで同意したであろうことは、認められるところであろう。

“Die Beziehungsvorstellung der Ursächlichkeit tritt aber empirisch überall da auf, wo zwischen zwei Vorstellungen eine sehr enge assoziative Verknüpfung und doch Sukzession besteht.”[8]（因果性という関係の表象は、けれども、二つの表象の間に、極めて密接に連合した結合とまた継起が存在するどんな処にも、経験的に出現するのである。）

他方では、いかなる心理学者も、人間が持つ次のような自然発生的な確信を尊重して来たにちがいないのだ。自身の運動活動を制御し、望む通りに手足を動かせられ、思考の流れを操縦できる、という確信を。ひとことでいえば、随意的な運動活動は、原因であるところの主体、《自我》によって引き起こされるという確信を。

ヒュームは、この点についてはマルブランシュを引き継いでいて、この信念を明瞭に述べた上で、誤謬として否定している。

[8] Th. Ziehen. *Leitfaden der Physiologischen Psychologie.* Fischer, Iéna. 1906.

“…our idea of power is not copied from any sentiment or consciousness of power within ourselves, when we give rise to animal motion, or apply our limbs to their proper use and office. That their motion follows the command of the will is a matter of common experience, like other natural events: But the power or energy by which this is effected, like that in other natural events, is unknown and inconceivable. “(Enquiry, section Ⅶ, part i 〔英訳に従って修正済み。〕). （‥‥力能についてのわれわれの観念は、われわれが神経運動を引き起こすか、あるいは自らの手足を然るべき用途と機能に用いるときの、われわれ自身の内部での力能の情感ないし意識の写しではない、と。それらの運動が、他の自然の出来事と同様に、意志の命令のあとに続いて起こることは一般に経験されるところである。しかし、これを引き起こす力能ないし活力は、他の自然的な出来事における力能や活力と同様に、知られないし、思い描くことができない。〔神野・中才（訳）p. 122〕）

つまり、抵抗に対する努力の印象が、力（もしくは原因）の通俗的で不正確な観念（notion）に入り込んでいることは、なるほどありうることだ。けれども、それは、必然性ということを含意する正確な観念とは無縁でしかない、とヒュームは言うのである。

“It must however, be confessed, that the animal *nisus*; which we experience, though it can afford no accurate precise idea of power, enters very much into that vulgar, inaccurate idea, which is formed of it. “(Essays, p.56, note).（われわれが経験する精神の**ニースス**（animal *nisus*）〔訳注　nisus：努力〕は、力能の正確で厳密な観念をも与えることはできないけれども、それについて形成される通俗的な、不正確な観念の大きな部分をなしていることは認めなければならない。〔同、p. 123〕）

かくして、因果性に関しては、「内的」な経験は外的経験と同一水準に置かれねばならないのだ。

ヒュームのこのような見解もまた、連合主義心理学者によって、多かれ少なかれ精密化され拡張されて捉え直されてきた。自我の因果という信念も錯覚にすぎないが、特定の諸現象にその源がある錯覚なのである。つまり、これらの著者たちによれば、そうした現象の一つは、現実に生じるまえに結果を予想するということであり、もう一つは「活動性」の感覚の現前である。この理論はミュンスターベルク（Münsterberg）の、いまや古典となった小冊子の中で、生き生きと述べられている[9]。

徹底的感覚主義の観点から出発して彼は、内的自由の感覚、すなわち能動的に意志するという感覚が生まれるためには、どのような仕方で諸感覚が結合されねばならないかを自問自答したのだった。

[9] H. Münsterberg. *Die Willenshandlung*. Freiburg, Mohr. 1888.

彼が言うには、結果が前もって思い描かれることが本質的なことである。けれど、器官感覚、特にかれが呼ぶところの「神経刺激伝達感覚 sentiment d'innervation」も無視できない。この感覚は彼の用語法では以前の運動の運動感覚的(kinesthésique)記憶以外のものではないのであるが一

"Uberall dagegen, wo wir uns schon wärend der Willensleistung unserer inneren Arbeit bewusst warden, da ist lebhaftes Innervationsgefühl vorhanden: gerade in diesem besteht ganz besonders das Gefühl inner Tatigkeit, und die Stärke der Willensanstrengung ist unmittelvar Ausdruck für die Intensität der Innervation."(p. 72). （一般にこれに反して、われわれが意志を働かせている間、すでに内面的作業を意識している際にはどこであろうと、生き生きした神経刺激伝達感覚が出現している。まさにここにこそ、とりわけ内的活動の感情が存するのである。そして、意志的努力の強さとは、この神経刺激伝達強度の直接的な表現になっているのである。)

３０年たっても、この命題はほとんど変化していない。それは、ツィーエン（Ziehen）から新たに引用する次の段落が示すところだ——

"Zu erörtern bleibt nur noch, wieso wir dazu kommen, unsere Ich-Vorlstellung als Ursache unserer Handlingen zu betrachten… (Es) berut offenbar auf den äusserst häufigen Auftreten der Ich-Vorstellung in der jeder Handling vorausgehenden Vorstellungsreihe. Fast stets findet sie sich mehrmals vertreten unter den der Schlussbewegung vorausgehenden Vorstellungen…"(ibid, p. 259).（いまや検討すべきは次のことのみである。すなわち、いかにしてわれわれの自我表象を、行動の原因とみなすようになるのか‥‥［それは］明らかに、どんな行動にも先っている表象系列のなかで、自我表象が極めて頻繁に出現することに依るのである。この表象は、結果的な行動に先行する表象という資格で、何度となく出現することが、常にみられるのだ‥‥）　。

そしてまた、他の箇所では—

"Dieser Komplex von Bewegunsempfindungen verleiht oft unserem Denken den Charakter der Aufmerksamkeit und einem Schein von Willkür und Aktivität, den es tatsächlich gar nicht hat." (ibid., p.213）.（運動的印象のこの複合体が、しばしば、われわれの思考に、注意という性格を、そしてまた随意性と活動性のみかけを付与する。実際にはそんなものを備えてはいないのに。)

けれども、何人かのほかの心理学者たちは、内的経験の中に、自由意志の介入を特徴づけ、自我に密接に結びついた、活動性に**特有な**感じ(sentiment *spécific*)が存在することを、たえず主張してきた。そしてこの命題は、比較的近年になって、アッハ（Ach)、ミショッ

トとプリュム（Michotte et Prüm)その他の研究の中で、実験的確証を見出している[10]。

メーヌ・ド・ビランによって最も徹底して展開された昔からの有名な考えが示しているのは、まさにこの見解である。それによると、われわれは直接的経験、われわれ自身の**因果性**についての経験を持っている。この経験は、ビランの目には、**原初的事実**（*le fait primitif*）を構成しており、それが、あらゆる心理学、あらゆる哲学の基礎とならねばならないのだ。この経験は―

「根源的に単純な、現象的な（phénoméniques）〔訳注 1〕ことばで云えば分離しえない関係の中にある。そこでは、原因と結果、主体と能動モード〔訳注　元々文法用語で、受動態でなく能動態にあること〕は、努力（nisus）という同じ感情もしくは同じ知覚において分かちがたく統合されている。その努力の固有の器官は意志に従う筋肉である。力や原因についてのあらゆる観念は、この努力の根源的印象に由来するのである。」[11]

随意運動とは、原因が自我であり帰結が筋肉感覚であるところの、直接に体験される活動なのだ―

「じっさい、活動する魂（âme）に固有の力にほかならない努力というものが、内面的に示されるのは、筋肉器官のなかで生み出されるこの変化によってではないのか？...それゆえ、こう言おう…ほかならぬこの意志と同一の固有の努力を魂に示すところのまさにこの内面的な感覚が、同時に魂に、原因に対する産物もしくは結果という性質とともに、努力によって生じる、器官的変容を示すのである。」[12]

そして、因果性の観念がもっぱら導き出されるのは、この経験からなのである―

「努力ということをしたことのない存在は、じっさい、いかなる力の観念（idée）も、それゆえ作用因（cause efficiente）〔訳注 2〕の観念もないであろう。彼はたぶん、運動が継起するのを見るだろう。たとえば一つの球が他の球に衝突し、前に追い立てられるのを見るだろう。この運動系列が開始されて持続するために必要であるとわれわれが信じている作用因あるいは効力（force agissant）という観念を理解することもなく、この一連の運動に適用することもできずに。」[13]

---

[10] N. Ach. *Uber den Willensakt und das Temperament*（意志の作用と気質について）. Quelle und Meyer. Leipzig. 1910, p. 240.
A. Michotte et E. Prüm. Etude expérimentale sur le choix volontaire. Archives de Psychologie. Vol. X. 1910, p. 194.
〔訳注 1〕phénoméniques：phénoménal が異常現象を指すことが多いため作られた言葉。
〔訳注 2〕cause efficiente：アリストテレスのいう４原因の一つで運動変化の原因。動力因とも訳される。他の３つは質量因、形相因、目的因。
[11] *Oeuvres choisies de Maine de Biran*. Editions Montaigne.Aubier. Paris. 1942, p. 165.
[12] Madinier. Conscience et movement (Alcan. Paris. 1938, pp. 169 seq.)　によって引用。
[13] Brunschvicg, *前掲書*, p. 34 での引用。

このビランの構想は、現代心理学の思想の中で甦ってその一部になっているが、それは、こどもにおける因果性観念の発達についてのピアジェの仕事に負うものである[14]。

「力の観念が内的経験から発していることは議論の余地のないことだと思われる。この起源を強調したのは、依然としてメーヌ・ド・ビランの偉大な功績である（Piaget, *Causalite physique ...,* p.140〔岸田秀（訳）、p.148〕）。

しかしながらピアジェは、内的経験から借用された因果というこの観念が、「物」へ、外的経験へとどのように適用されるかについて、極めて斬新な仕方で構想したのだった。ビランにとっては、「自我の因果性を非我へと移入する一次的な帰納（induction）」が重要であった。この移入にビランは、論理学的な意味での真の帰納の価値を与えるのに躊躇したのであったが[15]。この移入過程とは投射であり、リップスのエムパシー、感情移入（Einfühlung）という意味での投射であると、考える人々もいた。ピアジェにとっては、周知のように、子どもの原初的世界は未分化であって、この世界には「物」と「自我」とが互いに別々にあるわけではない。そしてこのことこそが、自我に属することが物体へも適用され得るための、必要条件なのだ。かくして「内的」経験は、たえず、いわゆる「外的」経験の所与と、いわば融合しあうのである。そして、このまったき未分化にあっては、

「子どもは、あたかも、まずはじめあらゆる物体に力を賦与し、最後になってやっと、自分のなかに、自分自身の力の原因である自我を発見するかのようである。」（*Causalité physique ...,* p.142〔岸田（訳）、 p 150。〕）

この引き剥がし（découpage）が生じるのは、子どもの一般的精神発達の結果によってである。
「力が事物から徐々に引き上げられ、自我のなかに閉じこめられる」（*Causalité physique,* p.146〔同訳書、 p 153。〕）。

「他方では、これがなぜ、同化と調節が分離してますます複雑な系を構成するのに応じて、自分の活動に他ならない因果の結節が、因果性の漸次的な客観化によって一連の諸中心へと破砕され、ばら撒かれるかの理由である。」（*La constr. réel,* p. 319）。

---

[14] ピアジェの思想としては、とりわけ次の著作を参照されたい。De quelques forms primitives de causalité chez l'enfant. *Anée psychologique*. Alcan, XXVIme annee, 1925;　*La causalité physique chez l'enfant.* Alcan. Paris, 1927〔ピアジェ『子どもの因果関係の認識』岸田秀（訳）、明治図書出版、1971〕;　*La construction du réel chez l'enfant*. Delachaux, Parais, 1937. Chapitre III.

[15] Maine de Birain. *OEuvres choisies,* p.248.

ピアジェの見解は、次の公式によって見事に特徴づけられる。

「力の観念は内的経験の結果であるが、はじめから内的と感じられていた経験の結果ではない。」（*Causalité physique,* p.144〔同訳書、 p 152。〕）

とどのつまりわれわれの観点にとって重要なことは、子どもにおける因果の観念が「有効性 eficace」に、つまり「欲求と得られる結果との連結感」（*Forms primitives,* p. 63）に、結びついているという彼の主張である。

この因果性は、「現象主義」つまり何らかの自然の諸出来事間にあると感じ取られる連連結と、「有効性」の混合である。そして因果的連結に力動的な性質を与えるのは、この有効性である。けれども、この原初的な観念は、客観的な世界に関してはしだいにぼやけて消えてゆき、因果性の機械的で合理的な概念によって置き換えられる[16]。

ビランの構想に近い構想が、もう一つある。デュルケムによって粗描された、社会学的な理論がそれである[17]。

この著者にとっては、前述の二人［メ―ヌ・ド・ビランとピアジェ］と同様、因果性の観念が外的経験からは発し得ないことは明らかであって、その起源を内的経験に求めねばならなかった（原著 p. 5〔本訳 p. 16〕）。しかしながら、ビラン思想の妥当性には疑義を挟んだのだった。なぜなら、デュルケムにとっては、努力、すなわち随意運動とは、本質的に個人的で伝達不能な経験であって、力というものの非個人的で伝達可能な性質を、説明し得ないからである。反対に、共同体によって個人の上に加えられる圧力の感覚こそが、因果経験の原型のあらゆる条件を満たす。この圧力は、じっさい、外部から来る（だから非個人的である）。それでいて、この圧力が現れて経験されるのは内的生のただなかであって、拘束という形態の下に介入してくるのである。個人は「この力が彼らの意志に働きかけて、ある種の動作を禁じ、あるいは別の種類の動作を命じるまさにその」瞬間に、この圧力を「感じる」のだ。

実をいうと、ここで紹介したのは理論のほんの粗書きであって、デュルケム自身がそれを述べているにせよ、それが本当に因果という問題に関わっているのかは疑わしいものがある。じっさい、それは因果性というより動機づけについての説明であり、共同体の影響の命令的な性質は、必然性と産出性（génération :〔訳注〕ある事象が他の事象を生むこと）

---

[16] ピアジェの労作は周知のように、子どもの精神発達過程において因果的説明がいかにして発達するかの、極めて興味深い一連の実験的研究の開花を促すという、めったにない栄誉を担ったのだ。他方では、これらの諸研究とそこでなされている議論は、本書が扱っている問題の解決のために役に立つ材料を、提供しているというわけでもない。それゆえ、ここでそれらを引用してみても、無益と思われた（XVII章を見よ）。

[17] E.デュルケム、前掲書〔脚注７〕、pp.521 以下。「したがって信徒たちは、この力が彼らの意志に働きかけて、ある種の動作を禁じ、あるいは別の種類の動作を命じるまさにその瞬間に、この力を感じる。」（山崎亮（訳）、p.278）。

の観念よりも、責務(obligation)とか義務(devoir)の観念を説明するのに適していると思われる。

内的経験の領域では、随意行動の他に、因果性問題に関して興味深く考察できる、他の材料がある。それらを要約すると、内観心理学に携わってきた著者すべてによって幾度となく確認されてきた、次の観察になる。すなわち、情動(émotion)も欲求も傾向も、それらを「喚起する」特定の事象、あるいはそこから「派生する」特定の事象に、緊密に一体化している、ということである。独立した現象の単純な継起のばあいには、これは重要ではない。けれども、因果の絆がそうであるような、正しいにせよ間違っているにせよ観察者によってしばしば指摘される**内在的**連結（liaison *intrinsèque*）では重要となる[18]。

『ゲシュタルト心理学』のなかの「洞察」に捧げられたとても興味深い章で、ケーラーは、この事実をたっぷりと強調し、この一連の連結の印象的な例を引用している[19]。

これらの実例には極めて教えられるところが多い。じっさい、この種の例のなかでの連結（liaison）の特徴がどんなものであるかを規定すること、あるいはむしろ、満足が行くように正確に言い表すこと(désigner)が、いかに難しいかが、確認できるのである。われわれ自身、Phelan による実験の過程で、類似の観察を行ってきた。そこではわれわれは、被験者の役を務めたのであった(それがなぜ外でもない Phelan の仕事に言及したかの理由であるが)。ケーラーもまた、報告の過程でおそらくは意図的に、多様な表現を使っている。微妙に意味の異なる一連のものをひとまとめに指示するために、**直接的規定**（*détermintion directe*）という総称が用いられる。微妙に異なる意味の一連の印象とは次のようなものである：これがあれに**依存する**（*dépend*）、あれ**から発する**（*sort de*）、**の結果である**（*result de*）といった印象。これはあれ**のせいで**ある（*cause de*）、これはあれ**から発して展開する**（*se développe à partir de*）、あれ**に由来する**（*provient de*）、に**属する**（*appartient à*）、**の自然な特徴である**（*une caractéristique naturelle de*）、**にかかわる**（*se réfère à*）、**の自然な結果である**（*la conséquence naturelle de*）、**いかにしてそしてなぜという印象がある**（*impression du comment et du pourquoi de*）、等など。

これらの表現の豊かさは、いかに「経験される」直接の絆の存在が疑いえないものであるかを、明白に証言している。そしてまた、この絆の現象的側面が**定義しがたい**こと、もしくは極めて変化に富んでいること、そして少なくとも一般的には、因果性を率直簡明に特徴づける印象というものにこだわるべきではないことを、証言している。そうはいってもこれらの例は興味深いものであり、本書の最後にこれらについて再考察することになるだろう。

イェール大で〔の国際心理学会議で〕われわれが擁護したのは、これまで振り返ってき

[18] この点に関してたとえば次を参照：G. Phelan. *Feeling Experience and its modarities.* Uystpruyst. Louvain, 1925, pp. 249 以下。
[19] W. Köhler. *Gestalt Psychology.* Liveright. New York. 1929, pp. 349ff。

たどの古典的概念にも共通していた基本的な〔因果知覚の〕否定とは、絶対的に対立する主張であった。じっさい、その会議ではわれわれは、ある特定の物理的できごとが因果性の直接の印象を与えることを、ひとつの対象が他の対象に**働きかけ**（*agir*）、ある変化を**そこに生み出し**（*y produire*）、ある仕方もしくは他の仕方でそれを**変容させる**（*modifier*）、という見解を発表したのだった[20]。そして、この主題についてさまざまな例を引用したのだった：一本の釘を板に打ち付けるハンマーの例、パンの一片を切り出すナイフの例。こうした活動を目撃しているとき、その知覚は、空間的時間的に協調する二つの運動の印象、たとえばナイフの前進とパンの中への切れ込みの進行の印象、というに限られるのだろうか？それともむしろ、運動活動をそのものとして直接に知覚し、ナイフがパンを**切る**（*couper*）のを見るのだろうか？答は疑いようなく思われる。

そのとき以来、この問題はいくらかの進展を見た。少なくとも、さまざまな心理学者がこの問題に心を傾けるようになったという意味では。

コフカは、その心理学ハンドブックの中で、ゲシュタルト心理学の観点では、因果性に固有の印象を持ち得ることは、考えられないことではまったくない、と明言している[21]。

ほぼ同時期、ドゥンカーがこの問題に、より特化した角度から取り組むようになった[22]。なるほど彼の研究は、［因果的印象という］問題に直接向けられたものではなく、問題解決とは何か、ということにむしろ向けられていた。ただしそれら問題解決は、しばしば因果的関係の発見とその利用を含んでいたので、この著者は必然的に、それに関する心理学的観念のいくつかを明確化する試みをせねばならなかった。

ドゥンカーは、因果的関係があるところでは、結果と原因という二つの事象は、ヒュームが指摘したようには常に「分離して」相互に孤立しているのではないということを、正当にも強調したのだった。多くの場合において、ある程度の「Einsichtkeit（洞察）」があった。すなわち、二つの事象間の連結は、少なくとも部分的には明白なものだった。

第一にこのことは、〔二つの事象の〕空間的な符合（coïncidence）のばあいに明らかである。原因の「場所」は結果が生み出される「場所」によって明白となる。それゆえ例えば、ケーラーの類人猿についての古典的実験におけるように、問題が外側にあるバナナを檻のなかへ引き寄せることである時には、バナナが置かれた場所が、原因が介入しなければならない空間のその地点を指示するものとなる。原因の場所が、他のどんな場所でなくほか

---

[20] 本書の題名としても用いられている「因果性の知覚」よりも、「因果的印象」という表現の方が好ましく思われる。われわれの見解では同じことになるとはいえ。以下に普通に使うことになる「因果的印象」の語は、じっさい、直接所与という観念、ドイツ語の「Erlebnis〔体験〕」の語の意味における、直接に体験される何かという観念を、より明確に喚起するように思われる。だから、因果的印象は、正確に「Verursachungs-erlebnis〔因果体験〕と翻訳される。

[21] K. Koffka. *Principles of Gestalt Psychology.* Brace. New York, 1935, pp. 378 seq.〔クルト・コフカ『ゲシュタルト心理学の原理』鈴木正彌（監訳）、福村出版、1988, pp. 437ff〕

[22] K. Duncker. *Zur Psychologie des produktiven Denkens.* Springer Berlin. 1935, pp. 76 seq.〔カルル・ドゥンカー『問題解決の心理：思考の実験的研究』小宮山栄一（訳）、金子書房、1952。入手・アクセス不可能のため訳書頁は特定できず〕。

ならぬ結果の場所によって示されるのだ。

第二に、時間的な符合の場合も明らかである。かくして、一陣の風がドアをバタンと閉じ、同時に廊下の別の端で電灯がたまたま点灯したというときに因果的関係の印象が生じる、これはまさに時間的符合である、とドゥンカーは言う。

最後に、形態と材料という観点からみて結果と原因のあいだに密接な対応関係がしばしばあるという場合に、明白である。ある玉が別の玉へ衝突する運動は、一般に、類似していて方向が同一の運動を、別の玉へと伝達する。ある対象によって付けられた痕跡は、たとえばある動物の足跡は、それらが印(しる)された対象と同一の形態をしている。雨の水気は雨が降り注いだ舗道の水気の中へと移動する、などなど。一言でいえば、形態や側面や方向等などの特徴は、しばしば、直観にとって直接的な仕方で、原因から結果へと移動するのだ。Causa aequat effectus〔原因は結果に等しい〕。そしてもしこれがヒュームと彼の支持者によって否定されたとしたならば、それは、彼らが主としてこの対応関係が存在しないような場合とか単純な引き金作用（déclenchement）の場合とか、この移行が隠されている場合が念頭にあったからである。実際、ここで問題としているような符合と対応は直観にとって常に存在するわけではない。ただし、それらが存在する場合は、ことのほかたやすく原因が求められることになる。

さらにいえば、肝要な論点は次のようになる：

“Allgemein empfinden wir als “Ursache” eines Ereignisse, einer Singularität, eine andere räumlich und vor allem zeitlich damit koinzidierende Singularität, welches ihrerseits als “Schnitt” zweiter in sich selbst gleichformiger Verläufe oder “Werltlinien” (c.à.d. extention spti-temporelle) resultiert.”
(p.80). （一般的にわれわれは次のようなものを、ある出来事、ある特異事象の「原因」として経験する。すなわち、別の、空間的にそして特に時間的にそれ（その特異事象）に符合する特異事象を。それはまた、二つのそれ自体同一形態の軌跡もしくは「世界線」〔訳注〕（すなわち空間的時間的延長）の「切断面」という結果になるのだ。）

かくして、「原因」という事象にとって本質的なことは、それ自体が一つの「遭遇」からなる、ということである。だから、電灯の点灯は、スイッチと腕の運動という二本の「世界線」の遭遇と符合する。同様に、舗道の水気は、雨と路面の遭遇と符合する、等など。

メッツガーは、深い思索で書かれた近著である心理学ハンドブックの一頁を、現象的因果性の問題に割いている[23]。彼もまた、外的経験のなかで因果の直接的印象を持ちうるこ

〔訳注〕「世界線」と訳した。アインシュタインの一般相対性理論でいう四次元時空連続体における世界線が念頭にあると思われる。

[23] W. Metzger. *Psychologie. Steinkopff*. Leipzig, 1941, pp. 120 seq.〔メッツガー『心理学—実験導入後の心理学における基本過程の発展』大村敏輔（訳）、九州大学出版会、1997、p.134ff〕

とを確信した上で、この印象が発生するためには、時間と空間の中での近接という構造的原理が重要であることを強調する。そして、ドゥンカーのそれと似た、一般的形式を採用する：

“Hierbei ist die eine Verlaufsunstetigkeit (die”Ursache”) *das Zusammentreffen zweiter zuvor getrennter verläufe*, die andere (die”Wirkung”) das *Neu-Entstehen oder Vergehen* irgendeines Gebildes oder seine Anderung in irgendeiner Eigenshaft, einem Zustand oder einem Verhalten.”（ここでは、経過の不連続性の一つ（「原因」）は、「最初、別々に進行していた二つの同一性経過が遭遇すること」であり、経過の不連続のもう一つ（「結果」）は、何らかの形象が「新たに生起すること、もしくは消滅すること」、ないしはその形象の何らかの固有特性や状態やふるまい（行動）が「変化すること」である。〕（大村訳、p. 138））

けれどもメッツガーは、現象的因果関係は、ある対象から別の対象へ、その対象のプロセスや性質を受け渡すことを含む、という着想をとりわけて強調する。そしてこの着想には、極めて的確に形式化して表現する価値があることを力説した—

“Es warden Eigenschaften der Ursache in der Wirlung wiedergefunden; d. h. es entsteht im grund nichts Neuers, sondern es geht nur etwas vorher bestehendes auf *einem neuen Träger* über … Im durchsichtigsten Fall (zwei zusammenstossende Billardkugeln) tauschen u. U. die zwei zusammentreffende Gebilde einfach gewisse Eigenschaften … aus; deart, das zwar die Identitätsverläufe der beiden *Gebilde* unstetig, die “Weltlinien” der betr. *Eigenschaften* oder Zustände aber, infolge ihres Uberspring von einen zum anderen Träger, glatt ist.”（原因の固有特性は、結果において再発見される。すなわち、根底において何ら新しいものは生起せず、ただ、何か最初から存在していたものが、「ある新たな担い手」へ移っていくだけである‥‥。きわめて明瞭な事例（ぶつかり合う二個の玉突きの球）では、遭遇する二つの形象は、事によってはただ何らかの固有特性（運動方向と速さ）を交換するだけである。この場合、確かに、それぞれの「形象」の同一性経過には、不連続が生じるが、しかし「当該固有特性（ないしは状態）の「世界線」は、当該固有特性が一方の担い手から他方の担い手へ飛び移ってゆくために「なめらかな」ものとなる。〔同訳書、ibid〕）

このような断言は、著しく大胆なものに思われる。なぜなら、たとえ日々の経験によって、しばしば、結果と原因の間の類似を認知することが可能であるにしても、ある対象から他の対象への同一性質の**推移**、**飛躍**（*saut*）は、明白とはまず言えないから。もしも明白だったとしたら、ヒュームの命題がはびこっていることもまた、理解しがたくなってしまうだろう。

そうはいっても、メッツガーのこの最後の引用文中で表明されている着想は、ある観点

では、少なくとも力学的因果性の領域におけるわれわれの研究から浮かび上がってきた理論的観念に近づいてはいる（それについてはもっと後の方で見ることになるだろう）。

２　因果性と活動性

以上、問題をめぐる経緯と状況を説明したので、いまやわれわれ自身の研究に取り掛かることができる。

最初の課題は、もちろん、典型的に因果的な印象を実験的に創り出そうと試みることであり、そして、その条件を経験的に確定することである。まったく当然のことながら、われわれは、２つの物体の衝突という古典的な場合の検討から、始めたのだった。さて、最初の実験いらい､理論的観点からも技術的観点からも､重要なことを確認したのだったが、それは、因果的印象は、必ずしも「現実の」質量を備えた対象の〔実験での使用に〕、束縛されはしないのである。因果的印象は、以下のような対象を使用することでも、まったく鮮明に喚起されるのだ。すなわち、見かけ上の厚みがない形態や単純な色の形態やスクリーン上に投影された形態へと、縮減された対象。それも、観察者がこのことを完全に知っている場合でもそうなのだ。この事実は、われわれの作業を著しく単純化してくれた。そのため極めて多様な実験が実現できたのである。対象の色や形態を、対象の運動の速度と方向を、往復運動の振幅を、「作用」と「反作用」の間の時間間、等々を系統的に変化させることにより。

それ以来、因果的印象を望みのままに出現させたり消失させたりが可能になり、この印象が生じる場合と欠ける場合を直接に比較できるようになった。これらの場合の研究によって、後に見るように、ゲシュタルト知覚法則に極めて類縁的な法則が介在していることが突き止められ、因果的印象をこの領域における既知の現象と関連付けることが可能になった。これらの研究によってまた、この因果的印象を、われわれ自身の活動性の効果を物の中に「投射」することに還元したり、過去の経験と獲得知識に基づく二次的な「解釈」に還元したりするような傾向のあらゆる試みを、決定的な仕方で除外することができたのだった。

こうした問題が解決された以上、二番目の課題が浮上する。この現象を「理解」し、それについて理論を作り、なぜこれこれしかじかの条件がこの現象が生み出されるのに必要であったのかを、そしてなぜこの現象はこれこれしかじかの特徴を備えているのかを探求する課題が。この後者の課題は、因果的印象の根源的かつ一次的な特徴の決定的な実証を提供すべき対照実験となるものであった。

この目標においてわれわれが系統的に用いた方法が、**発生的分析**の方法であった。これは要するに、ひとたび現象の諸条件が確定されたら、それら諸条件を、様々な仕方で単純化し、それに対応して生じる印象を、完全な〔単純化以前の〕経験を提供する印象と、比較することから成っている。それら比較された印象が、相互にどこで異なっていて、どこで類似しているかを見て取ることができれば、そこで一歩一歩、因果的印象の発生を跡付

けることが可能になるというわけだ。そうやって、様々な刺激条件の間で、因果的印象にもっぱら固有と一見して思われるこれこれの特徴を説明するのは何かということが、それ自体の観察検討によって特定可能になったのだった。

要するにこの分析の目標は、因果的印象に属する一群の印象群を見つけ出し、場合によっては、より単純な現象からの変容の（単なる視察によっては見逃されてしまうような）痕跡を、それらの中に再発見することであった。

知覚の心理学領域においてはこの種の分析は、すべての比較科学、たとえば比較解剖学で用いられている方法を、想起させるものである。後者において、退化した器官の「意義」が発見され、進化の様々な段階を跡付けながら、それらを完全に発達した器官へと結びつけるにいたったのと同様に、知覚の領域においても、諸現象の進化を跡付けることで、それらが呈している見かけ上きわめて乖離した諸側面のもとに諸現象の相同性を再認識することが、可能なのである。また、この手続きによって退化した器官を「理解」し、それがなぜ存在するかの謎を解くにいたるのと同様に、印象の諸特徴を「理解」することができるようになるだろう。この方法の射程距離についてくどくど論じる必要はない。われわれの研究を報告していく正にその過程で、この方法が有用であることは示されるだろう。

さらに、次のことに留意しよう。たとえわれわれが実際には上述の二重の目標〔最初の課題と二番目の課題のこと〕を追求しているとしても、実験的研究それ自体は、必ずしも異なってくるということはなかったのである。因果的印象を出現させる条件を確定する目的の諸実験は、また、概して、発生的分析の見地からいって好都合な実験でもあったのだ。

われわれの研究の根底には、二つの実験の基本形が見出される。以下はその説明である：
実験１[24]. ―観察者は、長さ 150㎜、上下幅 5㎜ のスリット（切れ目）が横方向に開いたスクリーンから、1.5m の距離に座る。このスリットのすぐ背後は一様な白い背景であり、その上に一辺 5㎜ の二つの正方形が浮かび出ている。一つは赤い色で、スリットの中央にある。その 40㎜ 左側には黒い色のもう一つの正方形がある。黒い正方形を対象Ａ、赤い方を対象Ｂと呼ぼう。被験者は対象Ｂを注視する。ある瞬間を定めて、対象Ａが動き出し、対象Ｂの方へ 30cm/sec 前後の速度で移動するようにする。ＡはＢと接触する瞬間に停止する。一方、Ｂの方ではその時に動き出し、Ａから遠ざかる。その速度は、あるいはＡと等しい速度であったり、あるいは 6cm/sec とか 10cm/sec といったかなり低速であったり、お好みのままにできる。それから、2cm もしくはそれ以上を、同じ速度を保って移動したあと、停止する。

[24] 本研究の過程のなかでの参照と想起を容易にするために、記述されたすべての実験に番号を振った。しばしば、一見したところ重要でないような細部でしか違っていない実験にも、異なる番号を振ることにもなった。

本研究のなかで引用される大多数の実験は、この実験１の例に準拠して記述されるだろう。それらの実験例は、違うという表示がない限り、ＡＢ同速度の実験として引用されることを、注意しておこう。

最後に、様々な実験のなかで述べられている速度値は、実験が実際になされる際の諸条件に応じて決められたものであることを付加して置く。とはいえ、何も特権的な速度値があるわけではない。つまり、数 cm/sec の違いなら、非常にゆっくりした速度の場合を除いては、ほとんど結果に影響しないのである。

これらの実験の結果は、完全に明白なものである。すなわち、観察者は対象Ａが対象Ｂに衝撃を加えてそれを**追い立てる**（*chausser*）とか、**それを前に跳ね飛ばす**（*le lancer en avant*）とか**それを投げ出す**（*le projeter*）とか**それを押し出す**（*lui donner une impulsion*）とかを見るのである。

この実験〔実験１〕は、引き続く実験と同様に、きわめて多数の（数百名の全年齢にわたる）被験者に提示され、すべての被験者が同じような記述報告をした。極端に分析的な仕方で観察し、時間の中で単に連動して継続する二つの運動を知覚したと述べたいくばくかの例外はあるが。数百回も同じ実験を繰り返したのに〔訳注　同一実験のくりかえしは一般に分析的な仕方での観察を促進すると考えられる〕、因果性の印象が無傷で保たれていた被験者たちもいたことを、付け加えておきたい[25]。

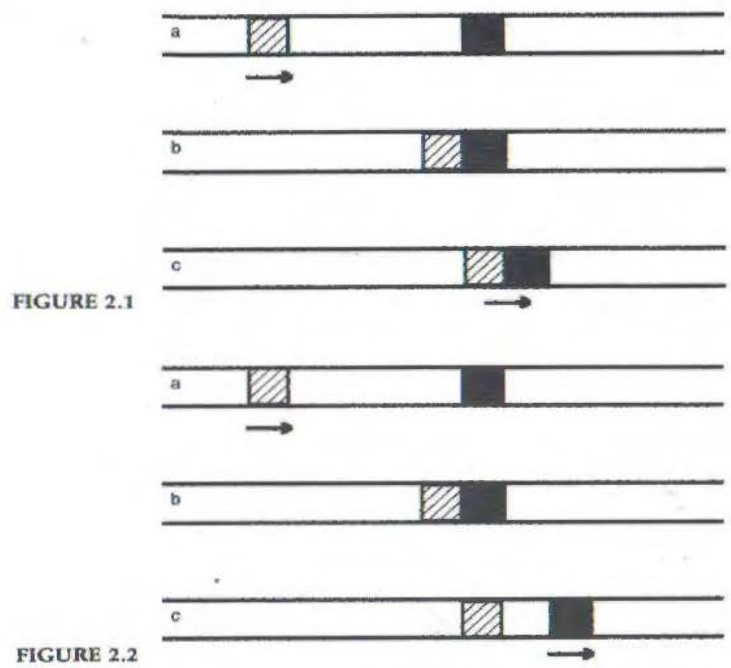

Figure 2.1 と Figure 2.2。２つの基本実験の図式的表現。文字 a、b、c が実験の異なる時点における動く対象の位置を示している。対象の下の矢印が、対象がその時点で特定の方向へ動いていることを示している。衝突の瞬間の対象の位置が、たとえ２つの対象中の１つもしくは両方がその瞬間に動いていても、矢印なしで表現されている‥‥。(Michotte, A., & Thinès, G. (1963). La causalité perceptive. *J. Psych. Norm. Path., 60*: 9-36.)〔訳注　Figure 2.1 が実験２に、Figure 2.2 が実験１に対応する。ただし、本文での「対象Ａ：黒い正方形」が図解では縞正方形、「対象Ｂ：赤い正方形」が黒い正方形として示されているので注意を要する。〕

[25] しかしながら、特に、「新規の」被験者であって実験室の人工的状況に不慣れのばあい、因

実験２．―前述の実験のばあいと正確に同じ仕方で装置と提示条件が準備される。ただ一つの相違は、対象Ａが、対象Ｂに接触して以後も、速度を変えずに進行し続けるところにある。対象ＢはＢの方で、Ａと接触したとたんにＡと同じ速度で動き出す。だから、２つの対象が並んだまま二色の長方形を形成し、一緒に移動する。そして３cm か 4cm を走行して停止する。

この場合、対象Ａが対象Ｂを**引きずる**（*entraîne*）、**共に引き連れていく**（*le prend avec lui*）、**拾って行く**（*cueille au vol*）という印象が得られるが、また対象の速度と大きさが違う条件では**前に押す**（*pousse en avant*）という印象にもなる。因果性の印象はここでも自明である。**Ｂを進ませ、移動させるのはＡ**なのである。

これらが、因果性の二つの典型実験である〔訳註　二つの実験の図解を Figure2.1 と 2.2 として他の文献から引用した。Figure2.1 が実験２に、Figure2.2 が実験１に対応する。ただし、本文での「対象Ａ：黒い正方形」が図解では縞正方形、「対象Ｂ：赤い正方形」が黒い正方形として示されているので注意を要する〕。それぞれ、**跳ねとばし**（*Lancement*）効果と**引きずり**（*Entraînement*）効果と呼ぼう[26]。

これら二つの実験のばあい、それゆえ、運動が生じるのは**直接に体験される**（*directment vécue*）のだ。推論とか、運動の印象に付加される「意義」とかは問題にならない。つまり、ここでの「所与」は、因果性の単なる表象やシンボルではない。ストロボスコープ上の運動が、心理学的に言って現象的運動の「シンボル」ではなく、現象的運動**である**のと同様に、知覚された因果性は現象的因果性なの**である**。

確かに、映画での知覚された運動は、いわゆる「現実の」対象の運動を「表象」しているのはもちろんである。けれども、それは、他の運動を表象する運動に他ならない。カン

果的印象は実験における初回の提示からすぐに出現しないということもある。そういう場合、これらの被験者では、二つの運動の明確な連動の印象もまた、出現しない。彼らは「混乱し」、何が生じているかの報告をしない。その印象は混沌として組織化（organisé）されていない〔訳注 organisation はゲシュタルト心理学では「体制化」と訳す習慣があるが、ミショットはゲシュタルト心理学派というわけではないので一般的な訳語を用いる〕。けれども、因果性という意味での構造化が自発的に生じるには、数試行あれば充分なのである。

この、知覚の組織化の遅延は、別に何も理論的重要性があるわけではない。なぜなら、それは明白に、この実験の特殊な条件とその奇異な特徴に結びついているからであり、原理的には、多分、対象の寸法が小さいことに結びついているからである（この後者の特徴は、後に第Ⅲ章の実験７で見るように注視が不完全にしかなされない場合、構造的組織化に甚大な影響をもたらす）。実際、この遅延は、違った仕方で実験を行うことによって、完全に除去することができる。たとえば投影の方法でもって（第Ⅱ章参照）、任意の大きさの対象を使用することによって。このような条件では、因果的印象は一挙に与えられるのだ。

[26] 周知のようにこの「効果」という用語は、トンプソン効果などのようなある特定の事実を指すのに用いられる。われわれがそれを用いるのも、同じ意味においてである。この語は、われわれの用語法では、一種独特の現象的所与が問題になっている場合、どんな誤解をも避けるのに役立つ。かくして、事実としては視野のなかで分離が生じているにせよ二つの対象が相互に関係なしに分離が生じているような単なる運動印象から、「分離（ecartment）」という特定の印象を区別するために、分離効果について語ることになるだろう（Ⅳ章, 2 参照）。

バスの上に描かれたある形態が、「現実の」対象の形態を表象しているのと同じ意味において。同様に、映画フィルム上に知覚された因果性は、ある「現実の」対象によって他の「現実の」対象へ作用する因果性を表象しうるが、心理学的観点からは、それはやはり、他の現象的因果性を表象する一個の現象的因果性にほかならない。

体験される因果性の典型的特徴は、とりわけ次のような場合にはっきりと浮き彫りにされる。実験１と実験２をちょっと変化させて、実験での二つの局面の間に（つまり、対象ＡがＢに接触する瞬間と、Ｂの方が（Ａを伴うか伴わないかにかかわらず）動き出すあいだの時間間隔に)、5 分の１秒かそれ以上の間隔を挿入し、生じた印象を間隔がない時の印象と直接に比較することによって。

時間間隔があると、因果的印象は完全に消失してしまう。観察者が見るのは次のようなものだ。ＡがＢに近づいて衝突して停止する。その瞬間にＡとＢはひと塊りとなり、二色の長方形を形成する。しかるのち観察者は、前の光景とは独立した新しい光景に立ち会うことになる。実験１の場合、ＢがＡから離れ、遠ざかる。実験 2 のばあい、二色のかたまりが単に一塊となり「一体」となって動き出すだけである。

この比較の結果は驚くべきものであり、すべての観察者が異口同音に、根本からして異なった印象になると断言したのだった。すなわち、一方では二つの本質的に結びついた出来事があって一つが他の一つを「引き起こす」のだった。他方では、二つのはっきりと別々になった出来事があり、継続的に生起するがそのどれもいかなる因果的性質も呈さない。

この最後の点は強調されるに値する。なぜなら、局面ごとに別々に様々な因果的影響と照応すると、事前には考えられていたからである。ＡのＢへの接近は、ＡがＢによって引き寄せられるという印象を生じうるだろうし、接触の瞬間の停止は、Ｂが、Ａの運動継続を妨げる障害物であるという印象を生じうるだろう。そして、第二の局面における分離は、ＢがＡによって押し出されるという印象を生じうるだろう、等々と。ところが、そのどれも実際には確認されない。これらの場合、いかなる因果的印象もないだけでなく、因果的「解釈」へのどんな傾向さえもないのである。

他方、個々の局面が、単なる運動の経験、空間中の移動の経験を構成する、というわけでもない。それらの局面は、後の方で研究することになるのだが、「近づく」と「遠ざかる」という顕著な性質を呈する。そしてまた、以後、強調せねばない、特殊な性質、文句なしの**活動性**（*activité*）という性質を呈する。

けれど、このことはいくぶん説明を要する。活動性という用語は、じっさい、心理学の著作のなかで頻繁に用いられているが、不運にも様々な意味で用いられすぎているのだ。だから、この語でもって理解されるべきところを明確にするのは不可欠なことになる。ここで問題になっているのは、ヴントの理論で周知になっているような意味での、運動に活気があることでもなければ、擾乱の印象でもなく、緊張と興奮の印象でもない。いままで、前述の実験に関して活動性について語る時には、それによって、**対象が働くのが、何かするのが見える**（*voit l'objet agir, faire quelque chose*）ということを述べているのである。こ

れは、単なる移動の知覚とは非常に異なるものであり、最もナイーブな観察者であっても、しばしば、これら両者の区別を、断定的な仕方ですることができるのだ。もちろん、この印象の下限閾を定めることは難しい。だから、これこれの運動に対して「活動性」の語を適用するのが正当かどうかと、際限なく論じ立てることが可能になってしまう。それに、そんなことは余計な、無益な問題というものだ。なぜなら、本質的な事実は、観察者が自発的にこれら事例を識別するところにあり、加えて、活動性が、極めてはっきりした程度の違いをもって提示されるところにあるから。下限閾に単なる程度の違いがあるだけか、それとも質的なちがいがあるかどうかは、二次的なことである。

そういうわけで、ここで問題になっている実験のなかでは、用いられる速度（これは本質的だ）に応じて、観察者は次のような印象を持つ。Ａが「Ｂへと赴く」とか、Ｂに**衝突する**（*heurte*）とか、Ｂに**衝撃を加える**（*choque*）とか、Ｂと一体となるとか。あるいは〔第二の局面では〕、ＢがＡと別れるとか、Ａ**から遠ざかる**（*s'en écarte*）とか、場合によってはＡから**逃げる**（*fuit*）とか[27]。

他の場合のなかで、とりわけＡがＢ（これは不動のままである）に到達した直後に出発点に戻るときには、速度の特定の条件に応じて、Ａが**Ｂを叩く**(*frappe B*)とか、**襲いかかる**(martère)とか、**つつく**(*pilonne*)（その経験が周期的に繰り返されるとき）といった様々な印象が生じるが、このことはすでに、極めて強調された活動性を構成している。

跳ね飛ばし(lancement)と引きずり(entraînement)の実験のなかでは、活動性という特徴はさらに顕著であった。そして、この特徴は、這うとか泳ぐといった運動のような、生物的p. 22>な運動印象で頂点に達する。われわれの実験ではこういった運動もまた、統制可能な条件において図式的な様式で実現できたのであり、その結果はめざましいものであった。

活動性は、それゆえ、特有の部類をなす現象的特徴なのである。この事実はきわめて興味深い。なぜなら、これらの問題に関し、「内的な」観察では不確定なままに留まってしまうとしても、実験条件を系統的に変化させることができ、不特定多数の被験者によって反復されうるような「外的な」観察のばあい、そんなことにならないことは明らかだから。

それにしても、われわれの〔因果性という〕観点にとっても、この問題は同じように重要である。なぜなら、活動性と因果性は、心理学者によって往々にして混同されてきたからである。これはとりわけ、本書の最後の方で見ることになるのであるが、ビランの学説の根底にある誤謬とおもわれる。そもそもが、問題になっているのは、二つの異なる「経験」であることは明らかだ。この二つは、知覚の領域では、異なる出現条件に対応しているのだ。活動性の印象を生じる条件は、因果性を生む条件よりも単純であって、一般的により実現しやすい。実際それは、因果性の印象のあるところに必ず存在している。なぜな

[27] 曖昧さを完全に回避するため、活動性の印象はまた、言うまでもないが、全体的知覚に結びついていることに留意したい。動く対象と静止した対象とは、同じ「全体」に統合されているに相違ないのだ。じっさい、このことは、最も「ナイーブな」観察態度と照応している。反対に、「分析的」態度は、動く対象を孤立させる結果となり、必然的に、活動という性質を消滅させ、単なる運動の印象が取って代わるのだ。

ら、因果性のすべての事例はまた活動性の事例であるから。しかも逆は真ではない。

しかしながらこの区別はある困難を惹起するので、それは退けねばならない。もしある対象が「何かする」という印象が生じれば、それは必然的に因果性を含意する、と読者は考えるかもしれない。そして、すでに引用済みの事例の中にも、まさにもっぱら現象的観点に立つことを維持してさえも、互いに区別できる原因と結果の存在を肯する理由があると、力を込めて強調するかもしれない。

かくして、衝撃(choc)を加えるという例の中では、対象が接触することはそれに続く運動とは異なるできごとであること、後者は前者の結果であること、それは自明に思われる。それならば、ＡのＢへの運動を衝撃の原因と見なすべきではないのか？それなのに、観察者はここで、跳ね飛ばしが与えるのに匹敵するような因果性の印象があることを否定するのである。そして、原因と結果があったか否か、どちらが原因でどちらが結果だったかと問われると、当惑してしまうのだ。Ａの運動は衝撃を**生じる**（*produit*）のではない。衝撃がＢの運動を生じるのと同様の意味では。

謎を解く鍵は、次の観察によって与えられる。われわれが見てきたような分析的にして抽象的な遣り口をするならば、確かに、二つの続けざまの—運動と接触という—できごとを合理的に区別することは可能である。けれども実際には、**二つの出来事**があるのではない。そこには順次的に展開する唯一の出来事があるだけである。後に示されるように、衝撃は一つの全体的な過程を構成している。この過程は発展する：それは接近から始まるが、この接近という関係性は、過程のあいだ中すでに二つの対象を結び付けていて、次第にますます親密になってゆく。そして最後の段階では、両者の直接の合体、接合にいたる[28]。この瞬間に、極めて短い質的な飛躍が、おそらくは存在するとはいえ、この合体は、それまでの持続的変化の最終局面であり、変化の境界をなすものである。全体とは**一つの**生成なのだ[29]。

そしてまた、観察者が、A が B に一撃を加える（A donne un coup à B）というような表現を用いるとき、それによって、Ｂに一撃を加えるのがＡの運動である、ということを言おうとしてわけでは決してない。なぜなら、「一撃」という語によって運動が意味されているのは明らかだから。同様に、対象Ａが一撃の原因である、ということを言おうとしたわけでもない。そんなことを言えば、Ａは自分自身の運動の原因である、と言っていることになってしまうから。観察者は単に、対象Ａが**衝突という作用**（*I'opèration du heurter*）を遂行した、と言わんとしたのであり、それは反省してみれば容易にわかることなのである[30]。

---

[28] 第Ⅳ章、２を参照のこと。

[29] おそらく過程の統一性は、逆の場合にいっそう明白だろう。つまり、対象の分離の場合に。なぜなら、対象が離れていくときには、それは引き続く運動とはまったく区別され、どのようにしても後者の原因とはみなされず、もっぱら後者への最初の段階をなす一局面と見なされるのみだから。

[30] 「一撃を加える」という表現は、じっさい、曖昧ではある。それは、いまの場合のように、ある任意の遂行に対応する。けれども、同様に、因果性のある場合にも対応しうる。「一撃」

この作用は、対象Ａに属し、その瞬間のＡの存在様式であり、Ａはこの作用の**唯一の遂行者**（*le seul exécutant*）となる。Ｂについていえば、この過程でのどんな実効的な部分ともなっていず、その役割は、参照点として役立つに限られる。そのように、この作用は完結しているので、どんな続きをも必要とせず、余分なものを持たない。第Ⅷ章、Ⅸ章、ⅩⅣ章で、因果的印象の理論を展開するときに見るように、こういう条件では因果的印象は生じえない。なぜなら因果的印象は、対象Ｂが、各局面のどれかにおいて過程に参与することを要するから。

この、現象的因果性と現象的活動性の間の区別をはっきりさせておくことは、本研究の対象を明確にするのに必要である。本研究では活動性の問題はほとんど取り上げないし、まして研究することもないが、いずれ、それには特別な著作を充てることになるだろう。

因果性という観点からは、二つの大きな問題が立てられる。**力学的因果性**の問題、**および質的因果性の問題**（*la causalité mécanique et celui de la causalité qualitative*）である。これらは順次検討に付され、それらについての調査実験が、因果性という観念の起源という主題のいくつかの考察に役立つことになる。

これら二つの根本問題のそれぞれに充てられた報告の量が、ひどく不均衡なのに、読者は驚くかもしれない。なぜなら、この二つには少なくとも対等の重要性があると、一見して思われるから。けれども、この不均衡は、本研究の結果のまさに性質によって正当化される。すなわち、第一の問題のばあいは肯定的結果が出て、第二の場合は否定的結果だったのである。

力学的因果性に関して言えば、すでに述べた二つのタイプ、跳ね飛ばしと引きずりが、順次、掘り下げて研究されるだろう。実のところ、引きずりによって提起される問題はより単純なので、たぶん、それから始めるのが論理的には望ましかっただろう。けれども、跳ね飛ばしの問題の困難さ自体によって、その解決のため努力を傾けることになったのであり、実験の大部分を行ったのはそれを主題にしてのことであり、これらの実験が、他方では、引きずりの説明の基礎を提供することになったのである。すでに述べた提示の順序が採られたのは、この理由からであった。

最後に、研究の提示に先立って、研究の実現を可能にした実験技術の詳細な説明を置いたことを、付け加えておこう。

〔第Ⅰ章　了〕

目次（pp. 305-306）

序言
広告

という言葉が、衝突によって生じた変形や、障害や、苦痛をさえ意味するように用いられたときには。そういった場合は、原因と結果の間の明瞭な区別があることになる。

序論

第Ⅰ章　問題のありか ····· 1
1. 歴史的概観 ····· 1
2. 因果性と活動性 ····· 16
第Ⅱ章　実験技法 ····· 25
1. 円盤という方法 ····· 26
2. 投影の方法 ····· 32

力学的因果性

第 1 部 — 跳ね飛ばし効果 ····· 40
第Ⅲ章　対象の隔離的影響 ····· 41
第Ⅳ章　対象の両極化的影響 ····· 50
1. 跳ね飛ばし効果における活動の射程 ····· 50
2. 近づきと遠ざかりの効果における活動の射程 ····· 56
3. 跳ね飛ばし効果と近づき・遠ざかり効果 ····· 61
4. 跳ね飛ばしにおける両極性の逆転 ····· 65
　1^0 トンネル効果の場合 ····· 65
　2^0 跳ね飛ばして飛ぶ ····· 66
　3^0 カモフラージュの実験 ····· 69
第Ⅴ章　対象の現象的側面 ····· 78
要約　N^0 1　第Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ章の要旨 ····· 83
第Ⅵ章　空間的時間的統合 ····· 87
1. 時間的統合 ····· 87
2. 空間的統合 ····· 95
　1^0 空間的連続性 ····· 95
　2^0 運動の相対的方向 ····· 97
　3^0 同一面での運動の位置決定 ····· 100
第７章　運動の諸速度と階層化 ····· 102
1. 対象に共有される速度と因果的印象 ····· 102
2. 速度と因果的印象の関係 ····· 104
3. 速度と統合性の関係 ····· 109
4. 諸運動の階層と、跳ね飛ばしと発射(Déclenchement)の効果 ····· 116
要約　N^0 2　第Ⅵ、Ⅶ章の要旨 ····· 120
第Ⅷ章　跳ね飛ばし効果の混合的側面 ····· 124
1. 跳ね飛ばしの場合 ····· 124
2. 発射の場合 ····· 141

第２部 ― 引きずり効果 ･･ 145
第Ⅸ章　引きずりの構造的組織化 ･･ 146
1. 引きずり効果と跳ね飛ばし効果 ･･ 146
2. 引きずり効果と運搬（Transport）効果 ･･････････････････････････････････ 148
3. 速度と引きずり効果の関係 ･･ 156
4.引っ張り（Traction）効果 ･･ 157
要約　N⁰ 3　第Ⅸ章の要旨 ･･ 160
第Ｘ章　爆発（expulsion）による跳ね飛ばし ･･････････････････････････････ 162
第Ⅺ章　推進運動（proplusion） ･･ 169
第Ⅻ章　動物の移動 ･･ 180
第ＸⅢ章　力学的因果性の触−運動感覚的知覚 ･･････････････････････････････ 199
概括的結論
第ＸⅣ章　運動の拡大 ･･ 214
質的因果性
第ＸＶ章　ある対象の運動と他の対象の質的変化の結びつき ･･････････････････ 229
第ＸⅥ章　二つの対象の質的変化の結びつき ･･････････････････････････････････ 240
要約　N⁰ 4　第ＸＶ、ＸⅥ章の要旨 ･･････････････････････････････････････ 249
因果性観念の起源
第ＸⅦ章　様々な説についての批判的考察 ･･････････････････････････････････ 251
1.　ヒュームの思想 ･･ 251
2.　メーヌ・ド・ビランの思想 ･･ 262
3.　ピアジェの研究 ･･ 272
4.　感情の見かけ上の「源泉」 ･･ 279
付録
推進運動の一特殊例：坑道掘進（Traçage）効果 ･･････････････････････････････ 283
1.　因果的坑道堀進 ･･ 284
2.　坑道堀進−流出（le traçage-écoulement） ･･････････････････････････････ 292
著者別索引 ･･ 299
事項アルファベット順索引 ･･ 300
〔目次　了〕

訳者解題　ミショットの実験現象学

１．総論

「凡例」で述べたように、本訳はミショット『因果性の知覚』(第２版、1954（初版 1946)）の本邦初訳である。原著は極めて分厚く 300 ページを超えるので、今回は序論：第Ｉ章(pp. 1-24)と巻末「目次」のみの部分訳とした。なお、英訳 Michotte, A. *The Perception of the Causality*（T. R. Miles, & Elaine Miles, Trans., London: Methen, 1963 [Kindle, 2017] ）も参照した（英語版には付録Ⅱとして「Theory of phenomenal causality: New perspective」と題した書下し論文がついているので、将来、あり得ない想定だが本書の完訳版が刊行される暁には、当然この付録Ⅱも併せて収録されるべきものと思う。本訳でも併せ収録したかったが、長くなりすぎるので次の機会に回した)。

本書は、カッツの色彩論や触覚研究[31]と並んで実験現象学の代表的著作とされ、ブルーナー『可能世界の心理』[2]（p.27ff）でも紹介されるなどして、現象学になじみのない知覚心理学者の間でもそこそこ知られていると思われる（少なくともカッツや１９世紀末のエーレンフェルス[3]の著作よりは知られているがゲシュタルト心理学者ほどではない)。ミショットについては、H. スピーゲルバーグ（訳書ではシュピーゲルベルクと表記)『心理学と精神医学における現象学』[4] (pp.112-115）に要を得た紹介があるので、まずそれを引用しておこう。なお、原著（pp.63-67）を参照して訳文は大幅に改定した。

ここは、ドイツ圏外の最初の現象学的心理学者ベルギー人アルベール・ミショットの仕事を紹介する適当な場所のように思える。というのは、彼の仕事は、発展してヴェルツブルグの世界を脱してルーヴァンで彼の学派を創立したとはいえ、彼が自叙伝でのべているように、“私がブレンターノ、マッハ、マイノング、フッサール、シュトゥンプフ、フォン・エーレンフェルスやその他の人々の仕事の存在を知った”のは、ヴェルツブルグにおいてであったからである（History of Psychology in Autobiography, ed. Boring, IV (1952), 227ff)。キュルペは、1904 年ギーセンの実験心理学大会でミショットと面談し（Messer にも面談したように)、そしてライプチッヒでの 3 年の後に、ヴェルツブルグへとミショットは誘われた。キュルペが媒介人であった。ミショットがヴェルツブルグに居住するまでには（1907-8 年)、メッサーとビューラーはすでに自分たちの論文を出版していたが、しかしビューラーはまだ私講師としてそこにいた。

しかし、このことは、ミショットがフッサールの哲学に魅惑されたということはしばらくおいて、ヴェルツブルグ学派の仕事への賛同者として、即座に現象学にかかわりあうようになったということではない。ミショットは本来、実験心理学者であったし、依然として実験心理学者のままであった。そして、実験心理学者として最も独創

[31] カッツの触覚研究は邦訳が出ているが[1]、色彩論は本邦未訳であるので、読者の便宜のため、詳細な紹介のある村田純一『色彩の哲学』（岩波書店、2002）を挙げておく。

的なひとりであった。しかしながら彼は、自分の経験を（哲学に関連した使用を含めた）新しい使用に適用した、一味ちがう実験主義者であった。しかし、現象学的哲学についてはミショットは敬遠した。これは、1953 年に私が彼の研究室で知覚の実験のいくつかを見せてもらえる特典を与えられたときに、特に明らかとなった。彼の研究室は、その当時ルーヴァンの高等哲学協会――フッサール文書が 1939 年初頭に収納された――と同じ屋根の下にあった。その時代に、アルカーイヴに収まっているフッサール文庫で研究されている現象学と自分自身の現象学的心理学との間の考えられる関係に彼は大きな当惑を表した。事実、私の知るところでは、彼の著作中でしばしばカッツやルビンやゲシュタルト学派のことばは触れられていたけれども、フッサールへの言及はなかったのである。

ミショットは、自分の実験に基づく証明によって哲学的な問題を解決したなどとは、主張しなかった。異論の余地のない現象の証拠が、彼が示したかったすべてであり、それらの現象が究極の現実を反映する、などと主張したのではなかった。この点で彼はおそらく、自分自身で思っているのよりもずっと現象学的であった。現象学についての彼自身の解釈では、1936 年以降にした仕事だけが（ルーヴァンにフッサール文書が到着したちょうどその年である）現象学であると考えているようであった（Ibid., pp. 213-36, esp. pp. 215, 227, 235）。

“1939 年という年は私の生涯における転換期であった。まだ実験的な方法を使いながら、現象学のある基本的な問題、私たちの経験の中での、因果律、永続性、見かけの現実の諸問題に取り組んだ時期の始まりであった“（p. 227）。

しかし、彼は現象学のこの仕事は“研究と省察の生涯の成果”であると書き加えた（p. 235）。

ミショットの意味でのこの現象学は、何であったのか？私の知るところでは、彼はそれを公刊物のなかでは定義しなかった。けれど、それは彼にとっては、可能なばあいには実験的な技術を使って、彼の被験者によって経験された現象を、そのまったき具体性において徹底的に探究するということを意味したことは明らかである。この解釈はもちろん、カール・シュトゥンプのような実験学派の現象学とほとんど異なるものではなかった。しかし、ミショットはまた、特に因果性の知覚についての彼の本の第２版の序文で、はっきりと、認識論的野心をすべて放棄した（*La perception de la causalité.* Louvauin: Nauwelaerts, 1954）。英訳には付録として重要な新章が加えられている〔引用者注「解題」冒頭参照〕）。従って、知覚の場合には、彼は因果性の真実の認識よりもむしろ因果的印象だけに関心を抱いた。これは、彼が自分の現象学的な発見を認識論的な問題と無関係と考えていたということを意味しているのではない。事実、哲学的問題に興味がなければ、また因果性の知覚に対するデーヴィッド・ヒュームの否定やメーヌ・ド・ビランの肯定という挑戦がなければ自分の実験研究を企てなかっただろうことを、ミショットは明言している。彼の仕事のなかでの実験の

役割は、ヒュームの言説がただどれだけ事実無根かということを具体的に示すためのものであった。彼ら哲学者は、精密さを、特に心理学研究に必須の作業上の注意深さを全く欠いた、表面的な観察や粗雑な経験に、基礎をおくしかなかったのだから、(252頁。英訳 255-6 頁)。彼は、因果性や物質性あるいは永続性といった印象が生じる条件、生じない条件を、正確に特定することによって、それを行った。ミショットの実証の後では、もはや因果的影響の決定的で記述可能な直接的印象をわれわれが持つということへの、どんな合理的疑いもあり得なくなった。とりわけ、キュルペのような批判的実在論的な眼や、ミショットのようなネオスコラ的伝統のなかにあっては。

因果的印象を導入するミショットのやり方は、真の因果関係を確立するときに、初めはこれらの印象の適切性に疑いを投げかけるかもしれない。というのは、彼は点や線のような人工的な視覚的図形を、それらの間の因果的関連を示すこともなしに、使ったからである。彼は許可を得て、彼の同僚の哲学者の発言を引き合いに出した。「因果的印象の現実性を立証し、その客観的妥当性を論証するために、あなたは事実上、錯覚から出発している」(p. 226、英訳 p. 228)。とはいえ彼は、こうして立証された客観性も、現象的間主観性以上のものではないことを認めている。とにかく、この現象は今やすべての唯名論的な懐疑論を切り落とすほどに明白なものになった。というのはミショットは、因果的印象を示したばかりではなく、刺激の異なった布置によって引き出されたいくつかのはっきりとしたタイプを区別したからである。特に彼は以下のような因果的印象を詳細に論証した。(1)跳ねとばし(lancement)—二つの動く対象が別れる場所での二つの運動の知覚に結び付いた明確なゲシュタルト。(2)引きずり(entraînement)—双方の対象が共同して一緒にどんどん動くところ。これには多くの細別(発射:release、爆発:expulsion, 自己-運動:self-movement など)がある。これらに共通していることは、作用者から受け手への運動の広がりの現象である。この広がりは、特にヒュームの因果性についての素朴な考えが見落としていた生産力の印象を含んでいる(p. 218 以下の文節。英訳 221 頁以下)。こうして知覚はただちに、単に依存の印象ではなく“発生”の印象を、発射効果の場合のように私たちに与えることができる。しかしながら、ミショットは、“質的な因果性”(一つの質が他の原因となる)が、比較しうる知覚を認めるとは考えていなかった。私たちが運動の外にここでみることのできるものの全ては質の連続である。

その他のミショットの“現象学的”実験は、三つの哲学的問題の解決のために適切なデータを与えている。

(1) 意図(“志向性”)あるいは目的論の現象的印象へ導かれ、明記できる特性—それはまた人為的に産出することもできるが—によって明示されたような動物の運動。
(2) 変化する印象における現象的永続性
(3) みかけの現実性

ミショットが自分の主な成果として主張したものは、感覚上の経験は想像以上にず

っと際限なく豊富であるということであった。ミショットは新天地を開拓し、新しい現象をはっきりと示したばかりか、実験の専門技術によって間主観的に近づきやすくした。現象の世界の豊穣化と実験的分析は両方とも、実験的な範囲を超えてまでも現象学の発展に主要な業績を示した。哲学的利用はミショットの研究所を超えて影響を及ぼしている。

一方、もっと哲学的な意味でミショットの研究はヴェルツブルグ学派から始まったが、このヴェルツブルグの知的環境へ現象学は少なくとも貢献したと主張できる。1939 年以前でさえ、意志の現象についての彼の仕事の多くは、広い意味では明らかに現象学的であった（Michotte et Prüm: Le Choix volontaire”(*Archives de psychologie,* X[1911],113-320)。そこでは、「現象学的」という語を、しばしば、「記述的」と同義に、「説明的」と反対義に用いていて、その内容に「意志作用の現象学」という特別な節（pp. 310ff）まで設けているのである。）彼が 1939 年以降なしたことは、主に知覚の領域のなかで問題を選択したという点で、彼が以前なしたこととは異なっていた。ミショットがこの仕事を「現象学的」と呼んだという事実は、現象学と認識論との間の彼の区別だての関係のなかで理解されなければならない。彼はすべての認識論的な主張を時期尚早として避けたかった。この注目すべき謙遜は、彼の発見の重要さをますます偉大なものにした。

――――――――――――――――――――

ミショットの業績の簡潔で要を得た紹介になっていて、付け加えることはあまりないほどであるが、それ以降に現れたミショット研究の中から、フッサール現象学から見たミショットの実験現象学、ミショットとギブソン、実験現象学の現代的課題、特に「感覚様相なき知覚」、の順にみていこう。

２．フッサール現象学から見たミショットの実験現象学

スピーゲルバーグ以降は、ミショット最後の助手であった Thinès の、「ミショットの実験的研究の現象学的背景」[5]と題した論考が、フッサール現象学との関係を検討するのに参考になるので、ポイントを絞って紹介したい。

そもそもミショットは、訳出した「序論」にも「現象学」の語がないことからも分かるように、実験現象学の語を自称として使うことはまれであったが、後期の著作では、実際には実験現象学をやっているのだという認識論的立場からの深い確信があったという。ミショットの実験的研究がどのような意味で現象学的かというと、二つの側面がある。

第一に、彼が用いた言葉が現象学的であった。たとえば、「現象的永続性（phenomenal permanence）」、「現象的依存性(phenomenal dependance)」、「感覚様相なき現前(amodal presence)」など。これらの言葉によって、観察者に現われるがままの現象を示そうとしたのだと思われるのである。

第二に、ミショットがこれらの言葉で表現される現象の出現の条件を実験的に統制しよ

うとした試みは、自由な想像的変更と照応するものである。「彼は、自分が研究している現象の**本質**（*essence*）については語らなかったが、実際には、彼が輪郭づけようとしたのは知覚された事象の本質もしくは**形相**（*eidos*）であった。その実験上の変数操作は形相的な洞察によるもので、本質の探究を導くフッサール的**射映**（*Abschattung*）原理の具体的な適用であった[32]。そのようなものとしてそれらは、実験心理学において、純粋現象学の規則が実際に用いられた稀有の例を代表している」[5]（p. 21）。

最近活況を来たしつつある質的心理学としての現象学においては、想像的変更の代りとされてきたのが標本収集による複数データの比較であった。「現象学的心理学者は本質というものを，多数の当事者による多元的な記述を通じて識別しようとする傾向があった。これは事実上，標本収集による想像的変更である」[6](p. 26)。実験心理学としての現象学においてこれに対応するものとして、Thinès の上の指摘を理解することができよう。また、ゲシュタルト心理学を現象学として捉えなおす際にもヒントなると思われる。

３．ギブソンとミショット

その後、ミショットの主要論文を編纂・英訳した「ミショットの知覚の実験現象学」[7]という大部の本が出て、ミショットの業績の全貌が明らかになるにいたった。ここでは「解題」としてすでに長すぎる枚数を費やしてしまっているのでその紹介は後日に回すが、注目すべきは生態学的心理学のギブソンとの関係である。そもそもこの編著の出版自体が、ギブソンに捧げられた”Resources for Ecological Psychology”の一環という位置づけであり、編者の一人 Costall, A.による「序文（Preface)」では、以下のようにギブソンの自伝からの文章を引用しているのである。

> ジェームズ・ギブソンが、ミショットの後期の仕事と自分のそれとの密接な類似に仰天したと言っても、誇張ではないと思われる。ギブソンは自伝の中でこう述べている：「知覚について、全くではないとはいえほとんど私と同じように考えた何人かの心理学者が存在する。近年では、ルーヴァンのアルベール・ミショットに、外的情報と外的意味を除いてすべてにおいて、驚くべき親密な同感を覚えたのだった。‥‥まったく異なる背景を出自とした彼のような人物と私のような人物が、これほど徹底的にかつ愉快にも意見を同じくするという、実験科学における収斂ぶりは、一個の注目すべき教訓であろう。彼は枢機卿 Mercier の学生であり、私は唯物論者 Holt の学生であった。彼は信仰者でかつ現象学者であり、私は懐疑論者で行動主義者である。彼は保守的なベルギーの貴族階層の一員であり、カソリック教会の申し子である。私は教皇に懐疑的な中西部の日曜学校出の根本主義者である。それなのに我々は同一の結果に到

[32] 〔引用者注〕様々にパースペクチブ（＝射映）を変えても変わらない不変項の抽出がフッサール現象学における本質観取（＝形相的還元）の方法であり、ミショットの変数操作はその実験的対応物である。

達した。そこが重要なところなのだ。真理への道の可能性がそこにあると、信じるに足るものなのだ。」（Gibson, 1967, p.142-143）

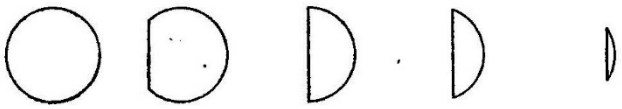

FIG. 8

ミショットは、ギブソンのように、中世以来普及している、知覚は究極のところ知性の介入に依存しているという視覚の理論に挑戦した。両者とも、意味は非媒介的な仕方で知覚できると論じた。彼らに共有された関心は、近代科学の存在論においては意味と価値が‘非実在的’で純粋に主観的な存在地位へと格下げされるのはなぜかという一般的な問題関心から出てくる意味の問題にあった。この問題は、科学的心理学の理念にとってまさに根本的なものである[8]（para.2-4）。

4. 感覚様相なき知覚（アモーダル知覚）

すでにスピーゲルバーグも触れているが、Thinès は、因果性知覚はミショットが取り組んだいくつかの課題の一つであって、他に根本的な問題として、現象的同一性、対象の現象的永続性、みかけの現実性、感覚様相なき対象補完（amodal completion）などがあったという。これらの問題群のなかで特に興味深いのが、「感覚様相なき対象補完」についての実験的研究である。これは「感覚様相なき現前」として Thinès による評の紹介中にも言及したが、現在は「感覚様相なき知覚 amodal perception」「アモーダル知覚」等と呼ぶのが一般的なので、この解題でもそれに従う。

まず、アモーダル知覚の実験図解を示そう[9](p.26)。

「Fig. 8」で、左から時系列的に、円の左側が徐々に欠けて、右端のような小部分になって最後は消失するような動画をスクリーンに提示する。すると観察者はほぼ例外なく、円が、目に見えない「遮蔽物」によって左から徐々に覆い隠されてゆくという印象を報告する。円が欠けて半円になって最後は消えるなどと言う報告は、まずお目にかからない。この覆い隠されるという印象は半強制的といってよいほど鮮やかなもので、推論の結果とは考えにくい。これをミショットは、対応する感覚刺激なくして生じる知覚印象、つまり様相なき知覚と呼んだのである。

私事にわたって恐縮であるが、訳者は大学院生のころ、修士論文のため仮現運動の実験に携わるうちに、偶然これと同じ現象を見つけた。話を聞いた当時の指導教官の柿崎祐一教授が、参考にと教えてくれたのがミショットらの論文[9]であった。そもそも本書『因果性の知覚』は、広範囲な現象を実験的研究の対象にしているだけあって、アモーダル知覚実験の原型も、原著 p. 65 に「トンネル効果」として出てくる（「目次」参照）。これは、本訳 p. 30 の Figure2. 1 と 2. 2 で、中央の四角が不動のまま、縞四角が左端から右端へと移動した場合に生じる印象であり、条件によって、縞四角が中央の四角の下に潜り込んでまたでてくるという、鮮やかな印象を生じるのである。訳者が自身の実験で「発見」したの

も、まずこのトンネル効果の方であった。

今世紀に入って、アモーダル知覚というテーマは、実験現象学の枠組みを離れて認知科学・認知哲学のなかで展開されるにいたっているが（たとえば[10-14]）、いずれの論文でもミショットらの原論文[9]もしくは英訳が[15]、出発点として参照されているのを見る。いろんな事情で訳者はこの実験を続けることができず、修士論文も未公刊のままになってしまったが[16]、今回、ミショットのこの書の翻訳を思い立ったのも、個人的な思い出が動機の一端をなしたことを申し添えておきたい。

付け加えるならば、アモーダル知覚というテーマは、認知哲学や現象学哲学にとっても、重要な問題を提起する。なぜなら、アモーダル知覚の概念は、物体の部分が他の部分によって隠された、花瓶の背面のような対象へも適用できるからである[11]。これは、直接経験を超えた存在をどうして認識できるかという、一部の現象学哲学者の言う「主客の難問」[17]にも関わって来る。論争の一端を紹介するならば、Nanay [11][12]によると、アモーダル知覚の説明として、(1)推論に基づく信念である、(2)心像（mental imagery）の働きである、(3)直接知覚である、という三つの立場が分類できる。そして、ギブソン[18]は(3)直接知覚説を取るが Nanay 自身は(2)心像説を取るという。その議論の詳細は省くが、結論として訳者には全く納得しがたいものであった。たとえば、ここでいう imagery は受動的非随意的であって能動的随意的に想像する働きである visualization とは違うというが、第一に、受動的非随意的な imagery の存在を実験的に実証することは極めて困難である。花瓶を知覚しながら背面の存在も確信しているという意識状態を反省的に把握しようとすると、自ずと能動的随意的に想像を発動させてしまうから。第二に、imagery が作働するか visualization が作動するかの条件の違い自体がモーダルな知覚内の構造的不変項によって与えられる以上、第一の論点と併せると、花瓶の背面を直接知覚しているというギブソン流の主張には、何ら不都合はないと思われるのである。

このような議論に立ち入ることは、「解題　総論」で引用したスピーゲルバーグのミショットへの表現である「注目すべき謙遜」からは、外れて見えるかもしれまい。けれども、心理学と哲学がとめどなく乖離しつつあったミショットの時代に比べて、２１世紀は両者がふたたび接近しつつある時代である。引き合いに出した Nanay も、ルーヴァン大学の関係者であるが、哲学系[11]と心理学・認知科学系[12]の双方の専門誌で議論を展開している。実験現象学においてフッサール現象学の方法を用いた「稀有の例」[5]（p.21）と評されるミショットの実験現象学から学べることは、哲学にとっても心理学のとっても決して小さくはないであろう。

参照文献

[1] カッツ、D.（2003）『触覚の世界―実験現象学の地平』東山篤規・岩切絹代（訳）新曜社.（Katz, D. (1925). *Der Aufbau der Tastwelt.* Leipzig: Verlag von Johann Ambrosius Barth）

[2] ブルーナー, G.（1998）『可能世界の心理』田中一彦（訳）、みすず書房.（Bruner, J. S. (1986)

Possible Worlds, Actual Minds.　Harvard University Press）

[3] エーレンフェルス，C. v.（2020）「ゲシュタルト質」について．村田憲郎（訳）、こころの科学とエピステモロジーhttps://sites.google.com/site/epistemologymindscience/ *vol.2,* 30-66. (Ehrenfels, C. v. (1890) Über Gestaltqualitäten. *Vierteljahrschrift für wissenschaftliche Philosophie, XIV,* 249-292）

[4] シュピーゲルベルグ，H.　（1993）『心理学と精神医学における現象学』西村良二，土岐真司（訳）金剛出版．（Spiegelberg, H. (1972). *Phenomenology in psychology and psychiatry.* North Western University Press.）

[5] Thinès, G. (1988). The phenomenological background of Michotte's experimental investigations. *Journal of Phenomenological Psychology, 19, No. 1*., 19-58.

[6] ラングドリッジ，D.（2016）『現象学的心理学への招待――理論から具体的技法まで』田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子（訳）、新曜社．（Langdridge, D. (2007). *Phenomenological psychology: Theory, research and method.* Pearson/Prentice Hall.）

[7] Thinès, G., Costall, A. & Butterworth, G. (Eds.) (2014). *Michotte's experimental phenomenology of perception.* Routledge (Kindle Edition). [Originally published in 1991, Lawrence Erlbaum Associates.]

[8] Costall, A. (2014). Preface. In G. Thinès, A. Costall, & G. Butterworth (Eds.), (2014). *Michotte's experimental phenomenology of perception.* Routledge (Kindle Edition).

[9] Michotte, A., Thinès, G. & Crabbé, G.（1964）*Les compléments amodaux des structures perceptives.* Publications universitaires de Louvain.

[10] Singh, M. (2004). Modal and amodal completion generate different shapes. *Psychological Science, 15*, 454–459. doi:10.1111/j.0956-7976.2004.00701.x.

[11] Nanay, B. (2010). Perception and Imagination: Amodal perception as mental imagery. *Philosophical Studies, 150*, 239–254.

[12] Nanay, B. (2018). The Importance of Amodal Completion in Everyday Perception. *i-Perception, 9(4)*, 1–16. doi: 10.1177/2041669518788887

[13] 高島翠・藤井輝男・椎名健（2010）アモーダル知覚における異方性　*The Japanese Journal of Psychonomic Science, 28(2),* 232-238.

[14] Ekroll, V., Sayim, B., Van der Hallen, R., & Wagemans, J. (2016). Illusory visual completion of an object's invisible backside can make your finger feel shorter. *Current Biology, 26,* 1029-1033. http://dx.doi.org/10.1016/j.cub.2016.02.001

[15] Michotte, A., Thines, G., & Crabbe, G. (1991). Amodal completion of perceptual structures. In G. Thines, A.　Costall, & G.　Butterworth (Eds.), *Michotte's experimental phenomenology of perception* (pp. 140- 167). Hillsdale, NJ: Erlbaum. (Original work published 1964)

[16] 渡辺恒夫（1974）運動知覚における見かけの重なりの諸現象　京都大学大学院哲学研究科心理学専攻昭和 48 年度修士論文（未公刊）。

『こころの科学とエピステモロジー』(Vol. 3)
https://sites.google.com/site/epistemologymindscience/

[17] 西研『哲学は対話する―プラトン、フッサールの〈共通了解をつくる方法〉』筑摩書房、2019。

[18] Gibson, J. J. (1972). A theory of direct visual perception. In J. R. Royce, & W. W. Rozeboom (Eds.), *The psychology of knowing* (pp. 215–240). New York, NY: Gordon and Breach.

【謝辞・付記】丁寧なコメントによって本訳のレベルアップに力を貸していただいた匿名の査読者に感謝いたします。

（2021.01.03受稿　2021.04.12受理）

【この翻訳と訳者解題は、『こころの科学とエピステモロジー』編集委員会により指名された１名以上の査読者のダブルブラインド査読を経たものである。 This Japanese translation has undergone a double-blind peer review of one or more referees appointed by the editorial board of the Journal of Epistemology and Mind Sciences.】